

【パネルディスカッションの要旨】

パネラー : 鈴木 保昭（倶知安観光協会会長）
汾陽 光照（株式会社ニセコリゾート観光協会代表取締役）
ロス・フィンドレー（ニセコ倶知安リゾート協議会 代表理事）
原 重一（原 重一観光研究所主宰）
木村 篤 （後志支庁産業振興部長）

コーディネーター：濱田 暁生（株式会社 CIS 計画研究所代表取締役会長）

○それぞれの組織の目的と活動内容について

鈴木氏：倶知安の町は観光で生き残るしかない。観光協会の役割は観光と住民の生活・利益、「町と山」との”接続詞”となるところにある。

汾陽氏：短期観光客、長期滞在者、住民のいずれもが利益を共有することを目標に活動していきたい。

フィンドレー氏：外の人にとってニセコというのは一つのところを指す。倶知安町、ニセコ町、山、街、あまり関係なく、とにかく「ニセコに行きたい」お客様。ニセコエリアを一括してプロモーション活動しないとお客は来ない。プロモーションとそれに見合ったインフラ整備のための行政との活動、持続的なビジネスを作っていくことを目標としている。三つの組織（倶知安観光協会、(株)ニセコリゾート観光協会、ニセコ倶知安リゾート協議会）と役場・会議所などで予算と人材をそろえて一つの事務所になっていくと、日本で初めての本当の国際スキー場、国際的なリゾートになると思っていい。

○三組織は具体的にどうしたら一体化して活動できるか

汾陽氏：ニセコ羊蹄エリアが観光産業の経済波及効果などを共有認識し、本当にやるのかやらないのか、が今一番の問題。そのまとまりができれば、いつでも連携して広域組織としてまとまっていくと考える。

鈴木氏：観光協会はニセコ山系で運行されている複数のバス路線を一本化することについて検討し、バス会社に呼び掛けている。その過程でニセコ倶知安リゾート協議会との協力も仰ぎ、将来的にはひとつの組織になればならない時期がくると思っている。

フィンドレー氏：このエリアの全体的なビジョンを作れるよう、どうやって皆で協力してうまく進めていくかが今一番の課題。方向性が定まらないうちにそれぞれバラバラに活動し、失敗をくり返し、時間がもったいない。

木村氏：我々の責務はこの地域を一体的なリゾートとして、外部に分かり易く説明できるようにすること。安売りせず、無理やりでもなく、時間をかけて良いリゾートを作っていきたいと考えている。今ビジョンが非常に大事になっている。今後の課題は、夏シーズンのプロモーションをもっとすべきという点、そして外国人観光客増加の経済的恩恵を地域が必ずしも受けていないという問題、すなわち工事の地元受注が少ない、資材の納入は町外から行われる食材なども少しでも安い札幌からの仕入れなどである。その課題解決の意味でも 2 町の境を越えて取り組むニセコ倶知安リゾート協議会に期待するところ。

原氏：出発点の一つは、これまで出されてきた様々な提言、提案書を事務局長のところに集約し、何

が合意され、何がかけているのかを整理すること。いつまでもクリンチワークばかりやっても、個々人の勉強にはなっても前に進まない。進める手がかりを協議会と位置づける必要がある。

もう一つはプロモーション活動の前提となるマーケティング調査だ。今後こういったスキーヤーやグリーンシーズン客が何を求めてニセコに来るのか明らかにすることが大切。

濱田氏：1点目のこれまでの計画やさまざまな構想を総合的に再点検する、ということは既にニセコ倶知安リゾート協議会で行っているが、やるべきことはわかっているけれど、でもできなかった。では、どこに原因があって、クリアすべき課題はどこかということのをこれから再点検し、再構築して、具体的に取り組もうと聞いている。今の組織の一体化を含めて次の展開の方向性が見えはじめたのではないかな。

2点目のマーケティングは外の目と内の目、世界を見る目とユーザーの目をきちっと捉えて行かないと。原先生の指摘のようにプロが関わっていく必要があると思う。

○会場参加者から

H氏：これまで成り行きに任せてきたために景観地区の件などで問題が起こっているのではないかなと思う。リゾートビジョンを来年度中、できるだけ早い時期に是非作りましょう。

U氏：この地域で事業のチャンスを見つけ、可能性を試したいという方は若い方ふくめ多い。そういう方たちをどうサポートいくかが地域全体の底上げにつながる。人の力、ネットワークを活かして、皆と一緒にしごとをやりたい。

原氏：協議会の仕事が増えるけど、人材発掘と人材バンク化も大事な仕事。この時代はコンサルタントを選ぶコンサルタントが必要な時代。発掘して評価して、最適ポストにはめ込む仕事は簡単ではない。

濱田氏：今、この地域でも「観光マイスター人材登録」など基礎調査をはじめているが、観光の人材だけがピックアップされているが、もっと幅広い、地域づくりに役立つ人材を含めてということですね。

原氏：対外的にも通用する名前とふさわしい人材は丁寧にやった方がいい。

K氏：ニセコ町と倶知安町、それぞれの役場の観光担当がニセコ倶知安リゾート協議会の中で仕事するようになればいいと思う。

UM氏：自分達が住んでいて満足なところにいろんながきていただける気持ちが基本だと思う。

T氏：観光客からひとり1泊50円なり100円なりを観光維持していくためのお金として徴収し、活動資金に充てられるのではないかな。

濱田氏：不可能ではない。ただ、活動資金のためだけでなく、観光に訪れる人々に対して、また、あなたたちが楽しんでいるこのエリアをこれからも引き継いでいくために必要な費用に関しては、応分の負担をしていただけますか、ということになるかなと思う。

○三組織の一体化に向けてここ1、2年で何をすべきか

汾陽氏：町の合併が進まないのであれば、将来的には観光部分を連携して合併するのだということを別な組織（場）で議論し、準備を進めていただきたい。それについては協力しながら頑張りたい。

鈴木氏：何かのきっかけがないと一つにはなれないと思う。1年後2年後に合併すると決めるのではなく、タイミングが来た時に自然にひとつになったら良いと思う。今の組織がしっかりと役割を果たせるよう頑張っていきたい。

フィンドレー氏：たくさんの投資が入ってくる中で、町のインフラが充実し、家族の生活感がよくなるようにできることが大切。今、あの山でカフェとかレストランとか山歩きができる、そして少しずつ倶知安市街地の方にも移っている。やはり、それだからこそビジョンが大切になる。

濱田氏：結局、今フィンドレーさんのいうところにつながるのでは。また原先生が観光地づくりと観光を通してのまちづくりは、ちがうですよ、ということにつながるのかな。

木村氏：皆さんが家に帰って見ることができるようなビジョンやルールを今年中にはつくっていく必要あり。ここはコスモポリタン（無国籍）この地域にいない人がこの地域を使って利益を得ようとすることは仕方のないこと。それによって地域が良くなるとダメなので、これらの必要性が高くなる。

○最後のまとめ（全文）

原氏：総合的にまとめるのは大変です。気づいたことを話します。

倶知安観光協会長は、こういう席だから仰られたんだらうけれども、倶知安は観光しかないという発言は非常に危険です。毛利元就の教訓を持ち出すまでもなく、やっぱり農業も大事ですし、いろいろなプロフェッショナルな人が住んでいて、そういう人たちが付加価値の高い仕事をやっていける生活環境、特に住宅及び住宅環境を整備することこそ大事だと思います。そしてそうした環境づくりはリゾートライフや別荘生活とも関連してくるはずで。ですから観光・リゾート事業の役割は当然ある。同時に農業の役割、あるいは小さくても様々な産業の芽が人材として存在していることが大事になるのです。いろいろな矢があったほうがいい。零細でも個人でも様々な製造小売業が元気な町は面白い。

そういう人々が生き生きと生活している町は地域外から訪れる人々にも魅力的な町になるのです。

総人口が減少化傾向にある我が国では、それぞれの定住人口をどのくらいにセッティングするかは重要な課題です。いわゆる交流人口との問題にも関連します。そういう意味では倶知安町とニセコ町約2万人、ニセコ羊蹄山麓地域で4.5万人が生活していく地域をイメージすればいいのかなあと。そのためには繰り返すようですが、今、観光、観光だとかリゾートだとか言ってみなが「そうだ、そうだ」でわっと流されることは非常に危険な話で、観光・リゾート事業がこの地域で大事な役割を果たせることは間違いないし、この産業は農業はじめいろいろな産業や住民とプラスの関わり合いが持てるという意味で、やりようによっては非常に多様な展開が可能ではあります。だから言葉を変えていえば「都会的なセンスで魅力ある田舎づくり」を目標にすることがこの地域にとって必要なのです。東京や札幌と一味も二味もちがう美しく魅力的な地域を再生させることがテーマになるはずで。

もう一つ、これは濱田さんと木村さんに質問ですが、支庁が、支庁長がなくなって道庁と直結した方がいいという意見はないのですか。たまたま木村さんのようにこの地域にどっぷりつかって精力的に活動してくれる人がいてくれる場合はいいけれど、彼らは2～3年でくるくる変わるわけです。ということも含めて、支庁があるために300～500人の人々が生活している、その定住人口がいなくなったら困るという話は別にある。だけど自治体の最小単位をどう考えるか。地方自治とか地方分権の話から言うと「本当にそうなの？」と。まあこの場で議論する問題かどうかはわかりませんが。これから大きな問題になってくると思います。

（濱田コーディネーター）

はい、ありがとうございます。幅広いお話でした。今のお話を聞きながら思い出したことがありました。実は先週、道南の江差町で「地域文化選奨」の贈呈式を、選考委員長としておこなって来ました。それは北海道が地域の文化活動団体に贈っている賞で、今年度は江差の繁次郎劇団という団体が受賞しました。で、その時に一緒に賞を受けた方が、北海道道民管弦楽団の代表の牧野さんという、余市町に住んでいる方で、彼は余市でワイン用の葡萄栽培を中心に果樹園をやりながら、演奏家として指揮者として音楽活動やワインを楽しむ会などの活動もやっていて、そのことも含めて先ほどもフィンドレーさ

んも仰いました、自分の家族の暮らしを豊かにするということと文化活動を一体的なものにして、ライフスタイルとして実現している。

観光は儲かるからやるという観光業ではない在り方が、ニセコだからできる、羊蹄だからできる、ライフスタイル型観光というの良いのかもしれませんが、観光の担い手としてだけではなく、自身が自分達らしい暮らしを地域で実現できれば良いと思います。そのようなことを思い出しながら皆様のお話を聞いていたのですが、では、個人のそういう思いと地域としての、流行の言葉だから使い難いのですが、「地域力」をあげて行く時の組織の在り方という辺りをどう価値観として申し分の無いものに組上げていくのか？が課題です。

今日は、こういうお三方（組織）が一堂に会するという本当に貴重な場で、一体的にやりましょうという方向を公式の場に出していただきましたので、そういう目標は共有しながら、次へ向けて何をやるか、汾陽さんのお話にあったように、別のところでというよりは一体化へ向けての議論の場や情報の一元化とか共有するための場なり、ビジョンを次のステップに持っていく具体策を検討する場なりをきちんと持ちながら、やって行くべきだということを結論にして、20分ほど超過しましたが、本日のディスカッションを終わらせていただきたいと思います。

どうもありがとうございました